

フィールドワーク的観光の可能性 ——親密性をめぐる一試論——

Consideration of the Possibility of Fieldwork-Style Tourism:
An Essay on Intimacy

山本 理佳*

要 旨

本稿は、今日のコロナ禍において求められる観光のあり方に寄与するものとして、「フィールドワーク的観光」というものを検討し、提案することを目的とした。コロナ禍以前には世界遺産の影響もあり、オーバーツーリズムと称される、局所的な観光地への観光客の過度な集中が多く見られる一方、そうした集客度には各地で差があり、目的地格差も生じていた。そうした中、このコロナ禍の社会変化を契機として、適正な観光に向けた観光変革が論じられている。とくに強く主張されるのはゲスト側（観光客）の変革である。そこで本稿では、その変革に寄与するものとして大学における観光教育を位置づけ、観光学や観光現象に関わる人文社会科学で重視されてきたフィールドワークに着目した。まず、とくに若年層を惹き付け、またフィールドワークとも関連する親密性という概念から検討した。その上で、自らの教育経験のデータからいかに「フィールドワーク的観光」が今後の求められる観光に寄与するかを検証した。結論として、「フィールドワーク的観光」を嗜好／志向／思考する段階的な教育のあり方がとらえられた。

* 立命館大学文学部准教授

Abstract

The purpose of this paper is to examine and propose “fieldwork-style tourism” as a contribution to the appropriate tourism required after the COVID-19 pandemic. Before the COVID-19 pandemic, tourism phenomena known as overtourism had frequently occurred all over the world by the strong influence of World Heritage and so on. On the other hand, the gap between destinations in the popularity had widened. In that situation, the social changes caused by the COVID-19 pandemic have led to discussions on tourism reform toward appropriateness in which the change of the guest side (tourists) is strongly advocated. This paper positioned tourism education in universities as something that can contribute to that change, and focuses on fieldwork, which has been emphasized in tourism studies and the humanities and social sciences related to tourism phenomena. First, I examined the concept of intimacy, which attracts young people in particular and is also related to fieldwork. Then, based on the data of my educational experience, I examined how “fieldwork-style tourism” could contribute to the future of tourism. In conclusion, a step-by-step approach to education for preference/intention/thinking of “fieldwork-style tourism” was identified.

キーワード：フィールドワーク、ツーリズム・リテラシー、観光者（ツーリスト）、コロナ禍、親密性

Key words: fieldwork, tourism-literacy, tourist, COVID-19 pandemic, intimacy

1. はじめに

コロナ禍とともにある今日、今後の観光のあり方が議論されている。とくに現状あるいはその後に必要とされているのは、ホスト社会にとって負荷が少なく、かつ持続可能な社会維持につながる、適正で創造的な観光である。これまでもそうした観光は多く取り組まれてきたものの、市場規模が貧弱で、運営組織の人材不足もあり、事業の継続性には様々な困難がある。そこにはそうした観光を選択する観光客の存在が不可欠である。

一方、近年では大学に多く導入されている観光教育に、観光産業に直接携わる人材育成のみならず、観光客（観光者）や観光地に生きる人々としてのリテラシーを含みこむべきとする主張がなされている（山口・須永・鈴木 2021）。すなわち大学は、上述の適正で創造的な観光をつくりだし、選択していく人材の育成に寄与することを期待されている。そうした場合、筆者は人文・社会科学分野の研究者が多く携わってきたフィールドワークを通じた地域社会との関わり方にこそ、大きな可能性が含まれているものと考え。本稿は、今後あるべき観光の可能性をフィールドワークという点からとらえ直し、「フィールドワーク的観光」というものを検討・提案することを目的とする。

とくにフィールドワークそのものも、今日のコロナ禍において、その意義や本質が問われるものとなっている。そのため本稿では、このフィールドワークとは何か、そしてそれが私達にもたらすものは何か、といったところをいま一度検討する。ここでは、後述の大学教育の対象である若年層が希求する親密性という概念と接合しうる、Appadurai (1997) の議論を参照しつつとらえ直す。そこから「フィールドワーク的観光」というものを提示し、それを自身の教育経験から検証しつつ、その教育可能性について論じることとする。

2. 観光の有り様と大学の観光教育

(1) 観光の弊害と適正化

新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的感染拡大が発生する直前には、観光の活発化が顕著であり、各地でのオーバーツーリズムを始めとする様々な問題が社会的な耳目を集めた。それに呼応して、関連した研究も行われている。たとえば世界遺産登録地への注目の増大やLCC航空路線、大型旅客船などの交通事情の活発化によって、特定の観光地に観光客が集中する実態および対策などの事例研究・分析が行われてきたばかり、オーバーツーリズムそのものについて検討し、その課題や対策・政策について考察する研究も進められている²⁾。そこに提示されている対策としては、総量制限（時間制限や客数制限、入場料の徴収など）や政策的な観光客分散化（広報・宣伝活動のほか、IT技術を駆使した局所的集中問題の緩和）、地域住民の観光政策への積極的関わりの促進などがあり、多くはホスト側主導による規制や課金等といった実践や対策が提言されている。

ところが、今日のコロナ禍においては、一転して観光客が激減する事態となり、観光地にはさらなる負担・影響をもたらすこととなった。いまだ出口が見えないコロナ禍の中、現状ではafterコロナ、withコロナにおける新たな観光のあり方が議論されるようになってきている。たとえば『立命館大学人文科学研究所紀要』125巻ではコロナ禍の観光の有り様に関する論考が多く寄せられた。そこで特徴的であったのが、ホスト・ゲストの関係性やゲスト側の意識・価値観における変革を唱導している点にある。すなわち、近年のオーバーツーリズムへの対策、あるいはこれまでの持続可能を目指す観光実践においても繰り返し示されてきた、ホスト主導というあり方のみならず、ゲスト側の何らかの変革に踏み入るべき、あるいは期待しうることが示されているのである。

具体的に、遠藤（2021）は、新型コロナウイルス感染症というリスクがも

たらしめたもの（^{ギフト}贈与）として^{ホスピタリティ}歓待の^{ギフト}贈与を提示するが、ここでの^{ホスピタリティ}歓待はホスト（地域住民）側よりもむしろゲスト（観光客）側に、地域の文化を大切ににする、という形で期待されるものとする。そこには、コロナ禍で必ずしも歓迎されるべき立場にはないことへの自覚を、観光客側に強烈なまでに促したことが背景にあるだろう。そしてそのことは、藤巻（2021）の言う、責任ある観光をゲストに求めていく道理が、ホストの側にももたらされているともいえる。また、そうした倫理的側面のみならず、域内観光（須藤 2021）や地域とのより密な関係構築が可能な観光（橋本 2021）を、ゲスト側が嗜好するようになる方向性も、様々な前提・条件はありつつも示されている。さらに、薬師寺（2021）では英語圏でのコロナ危機をめぐる変革に向けての議論が整理され、批判的・否定的見方も存在するものの、その肯定的見方では、現代観光を支える社会構造や価値変革への期待も見いだせるとしている。このように、とくにコロナ禍では様々な社会変化を前提として、ゲスト側の変容・変革に期待する向きが強い。

(2) 大学における観光教育

こうしたゲストの意識・価値観に働きかけうるものとして注目されるのが、ツーリズム・リテラシーをめぐる大学での教育機能である。ツーリズム・リテラシーは、「よりよい観光を実践するための技法と思考」として、山口他（2021）で提唱されている。とくに参照すべきは、その対象とする主体である。「ツーリスト（観光者）」「メディアエーター（観光業）」「コミュニティ（観光地）」の3つの層を設定し、とくに第1の層とした「ツーリスト（観光者）」を重視する。これまでの大学での観光教育は、観光関連産業で働く人材が念頭に置かれる傾向が強かった。ところが、様々な研究で明らかにされているように、大学の観光系学部・学科から観光関連産業への就職率はせいぜい1～2割程度であり、業界の人材採用においても大学の観光教育はあまり重視されていないという³⁾。山口他（2021）では、大学の観光教育での対

象設定を、ほぼすべての人が長きにわたって関わることとなる「ツーリスト(観光者)」も含めることによって、その裾野と可能性を広げる。加えてポスト・コロナを見据えたゲスト(ツーリスト)の変革が主張される中、大学教育は極めて重要な位置にあるともいえる。

では具体的に、どのような観光教育が適切なものとして設定しうるのか。先に示された「適正な観光」「責任ある観光」に直接資するとすれば、観光倫理に関する教育になろう。ただし、観光倫理研究の動向とともにその教育面での導入を見据えて考察した宮田(2016)や薬師寺(2019)が指摘するように、その善悪の明確な判断基準設定に困難が多くある点、観光がもつ楽しさ・快樂に制限をかけることの適切性・実行性に疑問が付されている点などがあり、進んでいないのが現状という。

そうした直接的な倫理性のみならず、そもそもの認識枠組みや価値観の変容・変革を目指すのが、先にあげた山口他(2021)であり、またコロナ禍の変化を受けて考察されたEdelheim(2020)などがある。Edelheim(2020)は、経済的価値のみに焦点が当てられがちな観光に対し、多様な価値に向けさせる意識醸成に高等教育が資するべきとした。とくに本稿では、そうしたツーリストの認識や価値観の変革にもつながる、大学の教育実践として、フィールドワークを位置づけたいと考える。

3. フィールドワークとは何か

(1) フィールドワークと親密性

フィールドワークは一般に、現場や地域での調査研究作業を指す。文化人類学や地理学、社会学を始め、様々な人文社会科学分野で多くの研究者が携わってきた調査研究法である。それだけに、大学教員が関わる教育実践の1つとして適切かつ重要なものとして位置づけられる。ではそれは、どのように観光者のリテラシー(技能)と結びつくだろうか。とくに、それらは多様

な分野において多様な形で実践されており、その具体的有り様から定義づけることは難しく、かつこのコロナ禍の、「現場や地域に赴く」ことすら制約が発生している状況下においては、フィールドワークとは何であり、そして何を人々にもたらしものであるのかを改めて検討するべきではないかと考える。

ここではアパデュライのグローバル化時代のフィールドワークを考察した論考 (Appadurai, 1997) を参照する。文化人類学者のアパデュライは、その著書 *Modernity at Large* (Appadurai, 1996/2004 門田訳) において、グローバルなフローが展開される中、ローカリティを様々に「生産」される多元的現象としてとらえた。Appadurai (1997) は、そのことを前提としながら、グローバル化時代の民族誌やフィールドワークが直面する課題・問題に触れているものである。ここでは親密さ・親密性 *intimacy* を鍵概念としながら、フィールドワークを見知らぬ世界の親密な関係の網の目に入ることととらえ、最良の民族誌は常にそうした親密性 (の記述) を目指してきた、としている。そして、いかに流動的な現代にあっても、人間の生活は (対人間のみならず記憶・モノも含めた) 親密性の実践を通して進行するが、ただその実践は必ずしも特定の時空間内に収まるもの (人々がローカリティ、コミュニティ、あるいは社会と呼ぶもの、また民族誌が頼りにしていたものとも表現している) ではなくなっている、とする⁴⁾。

伝統的社会から近代そして後期近代、あるいはグローバル化社会、情報社会、モバイル社会への移行によって、人々のあらゆる人・モノ・コトとの親密性の取り結び方は変容してきたが、何らかの形でその実践は展開されている。フィールドワークとは、そうした変容しつつも維持されている親密性の関係の網の目に入っていくこと、あるいはその関係の網の目に触れていくことを指す、と考えられるのではないだろうか。

アパデュライの論点で興味深いのは、そのフィールドワークそのものが取り結ぶ親密性も視野に入れている点であろう。ここではむしろ、その対象と

する関係性の網の目に絡め取られることなく、特権的な解釈者でいられたフィールドワーカーが、グローバル化のフローの中ではその特権的地位を維持できず、たとえばローカリティの共感や救済も求められるような状況に直面していることが指摘される⁵⁾。

このように、現代の社会内部で構築されている親密性の関係の網の目に、自らもその親密性の関係を何らかの形で取り結びながら入っていくことがフィールドワークである。とするならば、本稿で提案する「フィールドワーク的観光」とは、たとえば観光地をローカルな親密性の関係の総体としてとらえ、一時的であれ浅いものであれ、自らもそこに身を置く、そして知的的好奇心をもち、さらには知的探究を行う行動のこと、と定義づけることができる。

(2) 親密性の求心力

「フィールドワーク的観光」が、大学生という若年層を対象とする点で、とくにその親密性⁶⁾についてももう少し考察しておきたい。現代日本における若年層による親密性構築の特徴について、たとえば浅野(1999)は、自己の多元化が進行した現代、これまでの「深い」「浅い」という親密性判断の奥行きがなくなり、限定的・選択的に共有していく親密性が登場するという。あるいは関係性をつくっていく過程そのものを楽しもうとする側面も出てくる。また、土井(2004)では、今日の親密な関係性とは、多義化した個性を守るため、自分の率直な想いを抑え込み、過剰なほどの優しさを示しながら、相手が傷つかないように配慮するものとなっていると指摘する。本稿で「フィールドワーク」を定義づける中に用いている親密性は、当然、このような自己防衛的で浅いものでは成立しないが、ただしそのような親密性の感覚が社会的に(あるいは個人的に)形成・嗜好されているならば、そこも含めて「フィールドワーク的観光」の教育を検討していく必要があるだろう。

ことに、その内容はどうであれ、若年世代が浅野(1999)の言うような、

親密な関係性を多様な文脈に応じてつくっていくことに貪欲ならば、それを求めようとする力も強く働く。そうした感覚的な嗜好性を入り口としながら、「フィールドワーク的観光」の段階的な有り様を、具体的な学生の学習的気づきにもとづいて、次節で考察していきたい。

4. 教育経験における試論

本節においては、以上から導出した「フィールドワーク的観光」の可能性について、これまでの筆者の経験をもとに検討してみたい。

(1) 対象とする研修授業

筆者はこれまでに携わった9年間の大学教育において、ほぼ毎年、学外でのフィールドワーク研修の実施機会を得てきた。詳細は表1の通りであり、受講者数や行先、形態も様々であるが、研修内容として必ず含めていたのが、観光関係者（行政職員、観光協会、市民団体、商店街関係者、宿泊施設経営者、交通事業者、ツアー関係者）への聞き取りであり、また地元主導で考案されたツアーの体験参加（関係者による案内の時もあり）もほぼ実施してきた。フィールドワークと言っても、研修旅行に近い形であり、受講学生は地元主導のツアーに参加しながら様々な地域事情を聞き、あるいは地域で観光やまちづくりに関わる人々の話を聞き、地域の人達ともちょっとした会話を交わしたり、質問をしてみたりする、といった内容となっている。

ここでは、それらに参加した学生のレポート内の感想に描きこまれた何らかの気づきについて、親密性との関わり方などから、段階的にとらえてみる。

表 1 筆者が担当したフィールドワーク研修

実施機関	科目名	受講者数 (参加者数)	実施時期	行先
① 愛知淑徳大学	国内フィールド スタディ 4	4	2013 年 9 月	長崎県佐世保市 (黒島)
② 愛知淑徳大学	国内フィールド スタディ 4	6	2014 年 9 月	長崎県佐世保市 (黒島)
③ 愛知淑徳大学	国内フィールド スタディ 4	20	2015 年 9 月	岐阜県飛騨市 (神岡町・古川町)
④ 愛知淑徳大学	国内フィールド スタディ 4	22	2016 年 9 月	岐阜県飛騨市 (神岡町・古川町)
⑤ 愛知淑徳大学	交流文化演習 1a (ゼミ学習の一環 で実施)	20	2017 年 9 月	三重県熊野市
⑥ 愛知淑徳大学	交流文化演習 2a (ゼミ学習の一環 で実施)	20	2018 年 9 月	岐阜県飛騨市 (古川町)
⑦ 立命館大学	地域観光学フィー ルドワーク I	13	2019 年 5 月	和歌山県和歌山市 (加太・友ヶ島)
⑧ 立命館大学	地域観光学フィー ルドワーク I	13	2020 年 11 月	京都市右京区 (大映通り商店街)
⑨ 立命館大学	地域観光学フィー ルドワーク (国内)	25 (10)	2021 年 6 月	京都市中京区 (京福電鉄・壬生寺)

※⑧⑨はコロナ禍のため日帰りでの実施となった。

(2) フィールドワークによる気づきの多様な段階

まず、彼らの感想で最も多く見られるのが、現地の人たちとの（些細な）触れ合いに対する満足感である。表 2 に、その感想の一部を示したが、住民との触れ合いや交流がもたらす、温かさ（暖かさ）や優しさ、そして楽しさなどを感じていることがとらえられる。温かさ（暖かさ）や優しさは、先の若年世代特有の表面的なものとも言えるが、いずれにしても彼らにとっての親密性といった感覚を抱いていることが読み取れる。さらに、これまでの旅

行とは異なる楽しさ、再訪の意欲、将来の旅行の選択肢が広がった、など、自身の観光者としての行動選択に影響をもたらしたことを述べているものもある。

表2 フィールドワークによる気づき (1)

No.	科目	受講者の感想
1	②	地元の人達と夕飯を食べたのは普段経験出来ないことなので楽しかった。最初は年代の違う人達とご飯食べてなにが楽しいのかと思っていたけれど、黒島の色々なお話が聞けて楽しかった。広い交遊関係を持ちたいと思った。島から帰る時も1日の宿泊だったのですごく去ることがさみしいと感じた。もっと一緒にいたいと思った。こんな貴重な経験が出来て本当良かったと思った。…地域を活性化させようとしてる人達がたくさんいて、そのために色んなことを考えてることは大変そうだけと楽しいことだと思った。自分の将来の選択肢が今回の旅行で大きく広がった。
2	②	黒島の人たちは本当に優しく暖かい気持ちにもなった。島民の人は暖かいとよく聞けど本当に優しいのだと思った。…いつもより充実した旅行になったし、また黒島や佐世保に行きたいと思えた。今回の旅行はいつもと違う感じだったがとても楽しくてあっという間だった。
3	②	私たちが楽しく研修を終えられたのも、地元の方々がとても温かく迎えてくださり、親切にしてくださったからだと思います。地域ぐるみで協力している姿を見させていただき、そんな温かい人々がいて、体験型観光の資源も豊富な黒島をもっと多くの人に教えてあげたくくなりました。
4	③	この合宿を通して様々な人と出会い様々な話を聞くことができた。飛騨に来ることができてよかったし、また訪れたいと思う。
5	③	高山市では観光客が多く、建物をじっくりと観察したり、住民の方たちと直接触れ合うことはないが、古川では観光客の人たちも多くなると町の人も親切で道を教えてくれたり穴場の場所を教えてくれて人の温かさを感じることができた。
6	③	中でもお惣菜屋での計り売りが、現地に住む人のありのままの日常生活を感じ取れた気がしてとても楽しく、印象に残っている。近所やお土産屋の人々の温かさが身にしみた。また皆で戻ってきたいと思える合宿だった。

7	③ 夜ご飯を買い出しからすべて皆で協力してご飯を作るのが楽しかったです。私は、昼の市街地歩きで惣菜を購入してくるという役割だったのですが、惣菜屋さんのおばちゃんが、私たちが買うものに迷っていると一緒に選んでくれたり、足りないものはすぐに作ってくれたり、サービスも驚くほどにしてくれて、惣菜屋さん買いに来た地元の人は気さくに話しかけて古川町の人たちはとても優しくて温かい人たちばかりだと感じました。
8	⑦ 町で地元の方と少し言葉を交わす機会もあったが、住民の皆さんからはとても温かい雰囲気を感じた。
9	⑦ 2日間のフィールドワークによって、地元の人々の優しさを感じました。加太を観光しているときに「どこから来たの?」と声をかけてくださったり、お土産を購入するときに値切ってくださいたりとガイドブックに載っていない魅力もたくさんありました。
10	⑦ フィールドワークを行ったが、とても楽しかった。フィールドワークを進めていく中で、ただ目だけで加太を感じるのではなく、町の住民の方々に話を聞いたりして加太の良さを知るなど、ある種の冒険のような楽しさであった。逆にそういった町の人にきいて自ら加太の良さを探すというような観光の形もあるのではないかと考えた。

一部抜粋・編集の上、筆者作成

さらに、そのような自分自身が親密な関係性を「感じる」ことよりも、その観光資源と地域の人々との間にある親密な関係性を「知る」ことが自分の経験の価値をより高めることになったと感じているものもみられた。表3に示したものであり、発見や気づき、驚き、興味深いといった知的好奇心に満ちた感想となっていることがわかる。

そして表4には、表3と同様、親密な関係性を「知る」ことを経験したものはあるが、今後もさらに知的探究を進める意欲をもったこと、もしくはこれまでの自身の日常的な知的探究のあり方を振り返り、今後に向けた変革の意欲を持ち得たことなどが述べられている。

表3 フィールドワークによる気づき(2)

No.	科目	受講者の感想
1	③	実際に飛騨市、神岡町と古川町に訪れてみて、今まで行った観光地との違いを感じることはばかりだった。見ること、聞くこと、感じることをすべてが新鮮で新しい発見があった。地域それぞれにそれぞれの課題があり、取り組みや工夫がされていることに気づいた。
2	⑤	実際に熊野市に行き地域の方の話を聞き、熊野古道に多くの観光客が訪れるように、丸山千枚田の田んぼの数が増えるようにどういった努力をしてきたのかがわかった。実際に地域の人が15年間掘り起こした古道を歩いた。この足場が悪いなか眠っている歴史を発掘すべく15年間掘り続けたのはすごいと思った。
3	⑤	熊野古道が世界遺産に登録された流れの中で、目に見えていなかったものを発掘・調査するところから始まっていたと知り、とても驚いた。…なんとかして道を作り上げようという意思の強さと町民の協力が大きかったことを理解することができた。観光につなげるための努力を怠らなかつたことが今の結果に至っているのだと感じた。…実際の景色は一部しか見ることはできなかつたが圧倒された。峠の道を歩くことはとても大変だったが、見学することができてとても良かった。
4	⑤	世界遺産の授業で熊野古道を知っていたけど、15年間毎日2メートルずつ山道を掘り起こしたり道の整備をしたり地元の人達のおかげで熊野古道が出来上がったことは知らなかつたし感動した。世界遺産を訪れるのも棚田を見るのも初めてで、貴重なお話も聞いて良い経験ができた。
5	⑦	加太や友ヶ島について、この授業で取り上げられるまで、何の知識も持っていなかつた。しかし、事前準備を行い実際訪れてみると、この地域の魅力にたくさん触れることができた。地域の方々の、町おこしのための観光に対する熱意が伝わってきて、小さい町でもこのような地域があるということを知ることができた。個人的にもう一度訪れたい場所となった。
6	⑨	学生からの視点では思いもよらなかつた企業の努力などを、実際に企画を担当した方から話を聞くことでよりわかりやすく学ぶことができて大変興味深かつた。

一部抜粋・編集の上、筆者作成

表4 フィールドワークによる気づき(3)

No.	科目	受講者の感想
1	②	今まで、旅行といえば有名な観光地をめぐるだけ、名物を食べたりするだけで、町の中は車や電車で通り過ぎてしまっていたけれど、今回の旅行のように現地の人の話を聞いたり、商店街や道路などそこに住む人が日常生活の中にある場所を自分の足で歩いてみたりすると、その地域のことをより深く知ることができるのだということがわかった。
2	②	離島の現状を知り、このフィールドスタディでは、知らなかったことを大いに学び、知ることができ、貴重な経験を積むことができました。黒島を訪ねて、その後を知り島民の方との交流を深めたいです。
3	③	飛騨市古川町に行き一番印象に、今後必要な考えだと思ったことは、「観光資源をどう捉えるか」ということです。今回見てきた中では、瀬戸川が一番印象に残りました。瀬戸川も高度成長の時期は汚れとても使えるような水ではなかったが、それを美しい水として復活させようとした。つまり、地域の人の捉え次第で、50年、100年続く資源にもなれば、なくなってしまうことすらある。僕はこのことを通して、各地でビジネスをしていらっしゃる方へ興味を持ちました。今後はそういった方の元へ行き、お話を聴きにいてみたいですね。
4	⑤	知らないことをたくさん知ることのできた。今まで自分が生活してきた中にも、ひつじみかん牧場を始めたご夫婦のような人と会ってきたのかもしれないと思いました。ただの観光場所であると決めつけてしまうとそこがオープンするにいたった経緯・理由などを知ることができないし、知ろうとしていないことにつながると考えました。多くの人が関わりあって、熊野古道も丸山千枚田も観光地として成り立っているのだと改めて知りました。
5	⑤	今回の調査では、熊野古道保存・復元と世界遺産化の話聞き、どのように観光化したかを考えた。熊野古道を世界遺産にするまでには長い年月と努力があったことが分かった。熊野古道を観光地化するにあたって、道、トイレ、駐車場、東屋、スギ・ヒノキの看板の整備を行い、古道マップ、ガイドブックの発刊など、いくつもの工夫が見られた。棚田でも、面白いかがあつたり、途中で少し休憩ができるような場所があつたり、観光地化するための工夫を感じる事が出来た。
6	⑦	どれだけ文献やインターネットで調べていたとしても、実際に行ってみないとわからないことは多いと感じました。私たちAグループは、二名の方に時間をとっていただいて聞き取りを行う機会がありましたが、この経験は本当に大きなものだったと思います。とても有意義な聞き取りでした。
7	⑨	大学での学びの中では気づけないような発見を得られることや、様々な立場の人の話を聞けることで、自分の見識や価値観が広がると感じた。

以上より、大学のフィールドワーク研修がもたらす、地域の人々の親密性の関係の網の目との接触は、ツーリスト（観光客）の有り様としては3つの段階的なレベルでとらえられる。第一に、彼らなりに地域との親密性を感じ、そこに一定の満足を得るという段階であり、それを新たな旅行のあり方として自分の中に取り込もうとする。一方的で浅いものではあるものの、地域住民との触れ合いの心地よさや楽しさを知覚したことによって、感覚的には今後、フィールドワーク的観光を嗜好する可能性を持つ。第二に、自分の眼前にある観光資源が何かしら地域社会や関係者の働きかけによって立ち現れていることを知ったことが、実際に当該資源と対峙した際の感動や満足に作用している段階である。観光資源と社会との間に取り結ばれている親密な関係性の世界をとらえる知的的好奇心は、観光における情動を増大しうる。このことを理解したことで、今後フィールドワーク的観光を志向する可能性を持つ。さらに第三の段階では、もはや観光の枠内に限定せずに、これまでの知的探究の変革やフィールドワーク的探究の意志をもつ。いわば、フィールドワーク的観光を思考する、そのような人材となりえる可能性をもつ。

本来、フィールドワーク研修の効果は、このうち第三の段階を目指すべきであるかもしれないが、将来のツーリスト（観光者）の嗜好／志向を入り口としながら展開していくことを念頭に置いた場合、第一、第二段階の気づきも、決して軽んじるべきではないと考える。このように、フィールドワークという親密性を介することで理解しうる手法の教育的効果を段階的にとらえることで、たとえ主観的で独りよがりな解釈がスタートであったとしても、さらなる教育の機会を見出ししていくことは可能であろう。そこから、そうした教育を経たツーリストの「フィールドワーク的観光」は少しずつ浸透していく可能性をもつのではないだろうか。

5. むすびにかえて

以上本稿では、フィールドワークとは何か、そして何をもたらすか、ということを中心としつつ、現代において目指される適正な観光に寄与しうる「フィールドワーク的観光」の可能性を検討した。

全国的に多く展開される、地域住民が主体となって行われるツアー（着地型観光／コミュニティ・ベースド・ツアー）は、多くが無償であり、有償でも交通費程度であったり、かなり安価なものとなっている。そうすると、ガイド運用は極めて厳しい。一方、2～3時間のツアーについて、1人5千円程度の料金を設定しているものは、なかなか参加者が安定的に集まらず、苦戦していた。市の外郭団体である事業者は、行政からの補助金を投入することで成立させ、また、民間事業者は同様の料金設定でインバウンド需要により何とか成立させていた。日本人観光者は欧米と比較すると、体験型ツアーに対する金銭的価値づけがシビアで需要が多くないため、インバウンドに頼らざるを得ないとの評も聞かれた。ほかの民間事業者は、宿泊施設やシェアオフィスなど他事業との組み合わせにより、成立させてもいた。コロナ禍により、多くの事業者が活動の継続に困難をきたしている一方、参加人数やツアーリストの質の面でコロナ禍以前とそれほど変わらずに実施できているという事業体も存在した。ただし、やはり補助金は必要となっており、自律した事業経営は厳しいという。

こうした小規模な地元主導型の観光についての、コロナ禍も含めた運用の実態については、また別稿で論じていきたいと考えるが、それらの安定的運用には、少なくとも現在よりは、多くのかつ堅実で理解あるツアーリストを必要としている。その意味で、第一、第二の段階の「フィールドワーク的観光」を嗜好／志向するツアーリストを輩出する教育も重要であろう。局所的に集中し、格差を拡大していく観光を乗り越えるためにも、親密性を多面的に求める若年層の需要を、当然その親密性の限界やリスクとも向き合いながら、適

正な方向へ向けていくことが求められているといえる。

附記

本稿は、JSPS 科研費 20K12422 「グローバルなアジア世界の共生を志向するポリフォニック・ツーリズム（多声的観光）」、20K12417 「現代観光におけるガイドツアーの重要性に関する研究：産業遺産を事例として」による研究成果の一部である。

注

- 1) 世界的にもよく知られた京都やヴェネツィア、バルセロナなどのオーバーツーリズムについてとらえたものとしては、佐滝（2019）、中井（2019）、谷本・谷本（2020）、谷本・谷本（2021）、崔（2020）などがあり、インバウンド観光との密接な関連を指摘しているほか、鈴木・朝日（2020）など国内観光における地方都市への集中についてもとらえられている。ほか大型クルーズ船による観光客の集中に関する問題については、成美（2021）などがある。
- 2) グローバル観光の影響としてオーバーツーリズムや観光公害の問題をとらえる権（2018）や角谷（2020）を始め、先に上げた佐滝（2019）、谷本・谷本（2020）や崔（2020）などもオーバーツーリズムそのものを総括・検討しているものといえる。また、グローバル化やコロナ禍におけるモビリティと都市をめぐる議論の展開の中で、ジェントリフィケーションとともにオーバーツーリズムをとらえようとする笹部（2021）は興味深い。2019年度のセミナーの講演録（中井・松村・笹部, 2021）をもとにした論考であり、オーバーツーリズムが局所的な問題ではなく、グローバルな時代状況における都市の問題としてとらえる。
- 3) 全国の観光系学部・学科をもつ大学はおおよそ50校で入学定員は5千名程度、コース等を設置し観光を学べる大学まで含めると100校を超え、入学定員は1万名を超える。その中で観光関連産業への就職は10数パーセントから20数パーセントであり、決して多くない。加えて、企業側は入社後教育に軸を置いているため、採用前の大学の教育にはあまり関心をもっていないという（加納, 2013; 七枝, 2017など）。
- 4) ここで触れていないものの、論考内では、ライティング・カルチャーに関する議論も踏まえ、民族誌の表象のポリテクスの問題にも言及がなされている。
- 5) この論考は、雑誌 *Antropology and Humanism* におけるフィールドワークの現代的問題に関する特集に寄せたものであり、ここで具体的に触れているフィールドワークの問題を直接提起しているのは、特集内論文の Ortner (1997) や Bamford (1997) な

どである。

- 6) ここでは、アンソニー・ギデンズの親密性の議論を踏まえ、現代日本における親密性の問題を展開した桶川(2011)の議論を参照した。

参考文献

- 浅野智彦(1999)「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』(pp.41-77) 恒星社厚生閣。
- 遠藤英樹(2021)「アフター=ウィズ COVID-19の観光の可能性——『リスクの贈与』から『歓待の贈与』への弁証のために」『立命館大学人文科学研究所紀要』125, 3-22.
- 桶川 泰(2011)「親密性・親密圏をめぐる定義の検討——無定義用語としての親密性・親密圏の可能性」『鶴山論叢』11, 23-34.
- 角谷尚久(2020)「日本の国際観光発展のための基礎的研究」『環太平洋地域文化研究』(名桜大学) 1, 19-25.
- 加納和彦(2013)「観光関連学部・学科等における『学び』と将来の『仕事』との関係について——愛知淑徳大学交流文化学科観光分野専攻での調査結果を参考に」『愛知淑徳大学論集 交流文化学部篇』3, 17-36.
- 権 俸基(2018)「グローバル観光の振興とオーバーツーリズム」『広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報』14 (1), 45-54.
- 崔 錦珍(2020)「オーバーツーリズムの発生と持続可能な観光発展の課題」『九州国際大学国際・経済論集』5, 193-206.
- 笹部 建(2021)「グローバル・モビリティと都市の相互作用理論のために」『関西学院大学先端社会研究所紀要』18, 45-58.
- 佐滝剛弘(2019)『観光公害——インバウンド4000万人時代の副作用』祥伝社。
- 鈴木孝弘・朝日幸代(2020)「湯布院のオーバーツーリズムに対する持続可能なまちづくりに関する考察」『経済論集』(東洋大学) 46 (1), 1-14.
- 須藤 廣(2021)「新型コロナ危機から、世界リスク社会における観光について考える」『立命館大学人文科学研究所紀要』125, 77-101.
- 谷本 由紀子・谷本義高(2020)「ヴェネツィアにおけるオーバーツーリズムとその概念に関する一考察(1)——日本・京都への示唆」『関西外国語大学 研究論集』112, 223-252。
- 谷本 由紀子・谷本義高(2021)「ヴェネツィアにおけるオーバーツーリズムとその概念に関する一考察(2)——日本・京都への示唆——」『関西外国語大学 研究論集』113, 285-303.
- 土井隆義(2004)『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の編尿を考える』岩波ブックレット
- 中井治郎・松村嘉久・笹部 建(2021)「オーバーツーリズムとジェントリフィケーション」

- 『関西学院大学先端社会研究所紀要』18, 25-44。
- 中井治郎 (2019) 『バンクする京都——オーバーツーリズムと戦う観光都市』星海社
- 七枝敏洋 (2018) 「観光系学部・学科から観光関連産業への就職についての実証研究——観光関連産業は大学の観光専門教育を重視して学生を採用しているか」『比治山大学短期大学部紀要』53, 11-20.
- 成実 信吾 (2021) 「クルーズ船によるオーバーツーリズム問題、その緩和策の考察」『東洋大学大学院紀要』57, 117-136.
- 橋本和也 (2021) 「コロナ禍以後の観光——『一般生活者・一般観光者』の民俗的視点から」『立命館大学人文科学研究紀要』125, 124-150.
- 藤巻正己 (2021) 「世界遺産地区ペナン・ジョージタウンにおける「大衆観光地化」批判——COVID-19を契機として脱観光的／節度ある観光地へと仕切り直すべきだ!」『立命館大学人文科学研究紀要』125, 185-223.
- 宮本佳範 (2016) 「観光倫理研究の課題と展望」『観光学評論』4 (2), 135-148.
- 葉師寺浩之 (2019) 「観光倫理研究と教育の発展に向けた一考察」『地域創造研究 (奈良県立大学研究季報)』29 (4), 27-50.
- 葉師寺浩之 (2021) 「新型コロナウイルス感染症がもたらした危機からの観光の回復と危機を契機とした変化・変革をめぐる論点の整理」『立命館大学人文科学研究紀要』125, 151-184.
- 山口 誠・須永和博・鈴木涼太郎 (2020) 『観光のレッスン：ツーリズム・リテラシー入門』新曜社
- Appadurai, A. (1996). *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minnesota, US: University of Minnesota. [門田健一訳 (2004) 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社]
- Appadurai, A. (1997). Discussion: Fieldwork in the Era of Globalization. *Anthropology and Humanism*, 22 (1), 115-118.
- Bamford, S. (1997). Beyond the Global: Intimacy and Distance in Contemporary Fieldwork. *Anthropology and Humanism*, 22 (1), 110-114.
- Edelheim, J. (2020). How should tourism education values be transformed after 2020? *Tourism Geographies*, 22 (3), 547-555.
- Ortner, S.B. (1997). Fieldwork in the Postcommunity. *Anthropology and Humanism* 22 (1), 61-78.

